

全 体 研 究

I 研究主題

共によりよい生活を創造する子どもの育成（２年次）

～非認知能力「他者と協働する力」を発揮する学びのデザイン～

II 主題設定の理由

Ⅰ 「共によりよい生活を創造する子ども」について

２０３０年は、現在よりＶＵＣＡ（予測困難で不確実、複雑で曖昧）な時代となることが予測される。子どもたちは、正解が存在せず、現在の常識が通用しない、多様な考え方や利害がある未知な状況に対応しながら、自分や家族、社会などの幸せへの思いを強く抱き、自ら課題を見付け、他者と関わりながら、最適解や納得解を導いていくこととなる。

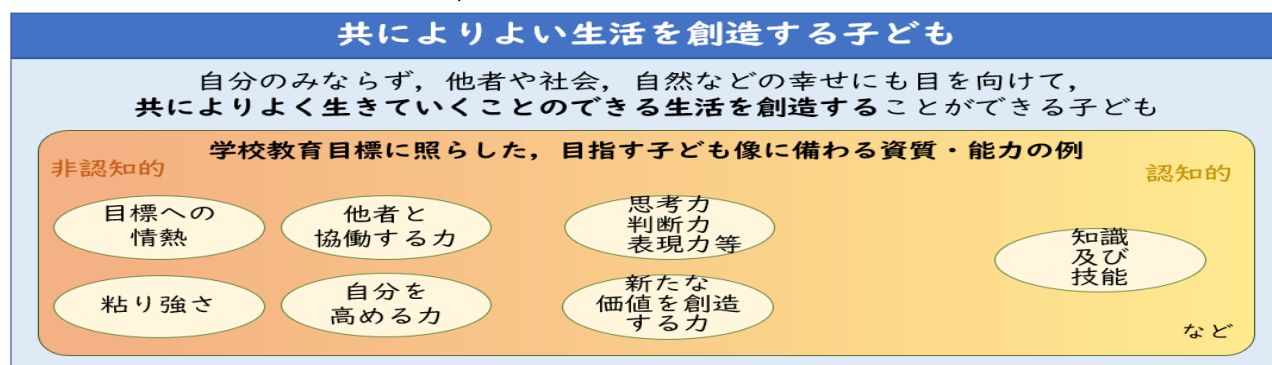
学校教育目標に照らした目指す子ども像を、非認知能力である「粘り強さ」や「他者と協働する力」、「社交性」等の「学びに向かう力・人間性」等

学校教育目標		
つよく ○目標をもって粘り強く 取り組み、失敗をしても 挑戦する子ども	ただしく ○一人一人の思いや考え を大切にし、互いに聴 き合う子ども	かしこく ○主体的に学習に取 組み、新たな価値を創 り出す子ども

＜図Ⅰ 学校教育目標に照らした目指す子ども像＞

性」等を含み、図Ⅰのように捉えている。この子ども像には、自分や他者、社会などにとっての幸せな生活に向けて、自らの進むべき方向を見だし、歩みを進めて欲しいという願いが込められている。

このような背景と子どもたちの実態から、子どもたちには、正解のない未知な状況の中で、自分のみならず、他者や社会、自然などの幸せにも目を向け、自らの手で現状の生活を改善して欲しいと考えた。つまり、共によりよく生きていくことのできる生活の創造を目指し、自ら歩みを進められる子どもを育成したいと考えた。そこで、研究主題を「共によりよい生活を創造する子ども」の育成とした。



＜図２ 共によりよい生活を創造する子どもの概要＞

2 研究の経緯について

昨年度は、研究主題「共によりよい生活を創造する子どもの育成」の下、１年次は副主題を「非認知的能力『目標への情熱』と『粘り強さ』に着目した学びのデザインを通して」とし、研究を進めてきた。

各教科等において、「目標への情熱」と「粘り強さ」が発揮された姿を捉え、その発揮された姿が現れるための学びのプロセスを想定し、そのプロセスを生み出す真正な学びのデザインの工夫を行った。真正な学びのデザインをする際には、「教科等を学ぶ本質的な意義に迫る学び」と、「当事者意識のある学び」や「現実の生活に近付ける学び」を視点とし、実践を行った。その結果、各教科等部が捉えた「目標への情熱」と「粘り強さ」が発揮された姿を多く見ることができた。「教科等を学ぶ本質的な意義に迫る学び」と、「当事者意識のある学び」や「現実の生活に近付ける学び」が「目標への情熱」と「粘り強さ」を発揮させる一要因となることが示唆された。

Ⅲ 本年次研究の方向及び副主題設定の理由

本校では、研究主題「共によりよい生活を創造する子ども」を育成するためには、教科本質的な学びが必要であると考えている。教科本質的な学びとは、当該教科等をなぜ学ぶのか、その学びを通じてどのような力を身に付けるのかという問いの答えにあたる教科等を学ぶ本質的な意義を踏まえた学びであると捉えている。本年次研究でも各教科等で教科本質的な学びを前提とする。

「共によりよい生活を創造する子ども」の育成において、「他者と協働する力」は欠かすことができない。なぜなら、共によりよい生活の創造には、他者や社会などが含まれるため、思いやりをもって、自分の身の回りの存在に寄り添うことが必要である。また、多様な考え方や利害の存在を認め、他者の思いや考えに耳を傾け、互いに尊重し合いながら、納得解や最適解を導く必要があるからである。

さらに、学習指導要領総則には、「変化が激しく予測困難な時代の中でも通用する確かな学力を身に付けるためには、自分のよさや可能性を認識して個性を生かしつつ、多様な他者を価値のある存在として尊重し、協働して様々な課題を解決していくことが重要である」と示されており、VUCAな時代を生きる子どもたちにとって、「他者と協働する力」は、非常に重要であると考えられる。「他者と協働する力」を発揮しながら、各教科等の問題解決的な学習に取り組むことで、互いの思いや考えを尊重しながら、子どもたちが、まさに、響き合うように問題や課題を解決に導くことができると考える。このような姿が、繰り返し現れることは、「共によりよい生活を創造する子ども」の育成とつながる。

そこで、他者と円滑にコミュニケーションをとることや他者を思いやること、他者に共感すること、多様な他者を価値のある存在として尊重すること、他者に配慮すること、他者と協力することといった非認知能力である「他者と協働する力」に着目して、研究を進めることにした。

Ⅳ 研究目標

- ・「共によりよい生活を創造する子ども」を育成するために、非認知能力「他者と協働する力」に着目した学びのデザインの在り方を、実践を通して明らかにする。

Ⅴ 研究課題

- ・各教科等の本質的な学びにおける、非認知能力の「他者と協働する力」が発揮された姿は、どのような姿か。
- ・非認知能力の「他者と協働する力」が発揮されるまでの、学びのプロセスを基にした学びのデザインは、どのようなものか。

Ⅵ 研究内容

Ⅰ 「他者と協働する力」が発揮された姿

「他者と協働する力」が発揮された姿は、子どもたちの表情や仕草、他者との関わり方など、多様な姿として現れると考えられる。本研究における「他者と協働する力」が発揮された姿は、教科本質的な学びの中で発揮される姿を想定する。

そこで、各教科等研究においては、本質的な意義を踏まえた上で、何のために協働するのかという問いの答えにあたる、子どもたちが協働的に学習することの意味を明確にする。そして、各教科等は、その明確にした意味を基に、「他者と協働する力」が発揮された姿を捉える。以下の図のように、その意味を体現している姿ほど、より強く「他者と協働する力」が発揮された姿として判断する。

教科本質的な学び



協働的に
学習する
意味

発揮の度合いが強い

＜図3 「他者と協働する力」の発揮のイメージ図＞

2 「他者と協働する力」が発揮される学びのプロセスと、そのプロセスを基にした学びのデザイン

(1) 学びのプロセスを捉える

学びは連続的であり、それぞれの学びにはつながりがある。このような学びの中で現れる子どもの姿には、その姿に至るまでの子どもの意識が存在する。また、教科等の特性によって、「他者と協働する力」を発揮することに対する困難さがあることが考えられる。そのため、各教科等が抱える「他者と協働する力」を発揮することに対する困難さから「他者と協働する力」が発揮されるまでの意識の過程である、学びのプロセスを捉える。

(2) 学びのデザインをする

①教師と子どもが共に実現を目指す教科本質的な学び

昨年度研究において、教科本質的な学びを実現するために、教師と子どもが、一緒に教科等を学ぶよさを考える機会を設けた。この教科等を学ぶよさとは、教師が捉えた教科本質的な学びについて、学習方略を含んで、子ども目線で再構成したものである。つまり、この学ぶよさを子どもと共有することにより、教師も子どもも、その教科等の本質的な学びの実現を目指すことができる。

本年次研究では、昨年度の研究で作成した教科等を学ぶよさに、協働的に学習することの意味を加えて、子どもたちと共有する。また、教科等を学ぶよさについて、子ども自身が「見通し」「実行・振り返り」「次への目標」といった過程で、教科等を学ぶよさと自己の学習を照らし合わせ、振り返り、次の学びにつなげることを繰り返す。これにより、子どもたちは、教科本質的な学びの実現へと向かっていく。そして、その教科等ならではの学習方略や見方・考え方を自在に用いることができるようになると思う。問題解決的な学習の過程に沿った子どもの意識の例は以下に示す。

問題解決的な学習の過程 (学ぶよさの活用サイクル)	子どもの意識
つかむ (見通し)	この単元が終わると、〇〇いう力(資質・能力)がつきそう(全) 今後の学習でも〇〇いうことができるようになりそう(全) 問題が解けるだけじゃなくて、数学のよさを見付けるぞ(算数) この運動の楽しさを、いろんな関わり方で、味わおう(体育)
追究する (実行・振り返り)	数学のよさって見付けられているかな。(算数) コミュニケーションを楽しむためにどんなことができたろう(英語) 比較、関連、総合したら、つまり〇〇いうことが言えるな(社会) 友達の作品を見ていなかったな。次は参考にして自分に生かそう(図工)
まとめる (次の目標)	この単元で学んだ〇〇は、次にも使えそうって思えるぞ(全) 予想も実験も考察も、科学的になるように解決できたな(理科) 友達と感じたことを伝え合って、納得いく表現ができたな(音楽)

②プロセスを基にした学びのデザイン

教科等が抱える困難さから「他者と協働する力」が発揮される学びのプロセスを基に、学びのデザインをする。学びのデザインをするとは、子どもたちが非認知能力を発揮するように、意図的に環境や活動を設計することである。

○環境を設計する…子どもの周囲の人、もの、ことを設計する

人 → 友達、教師、専門家、家族など

もの → 座席配置、掲示物、動線を考慮した場づくり、道具、材料、学習プリント
空間、ICT 機器、実物

こと → 取り出しやすい情報の中身（質や量）、十分な時間、学習風土、体験、経験

○活動を設計する…単元・題材等の構想、一単位時間の学習活動

- ・他者と協働する必然性のある展開
- ・思わず他者と関わりたくなるように、時間的、空間的に工夫した活動
- ・個別最適な学びと協働的な学びの意図的な配置
- ・一人では解決することの困難さや立場の違い、合意形成の必要性を含んだ活動
- ・課題設定の工夫

- ・探究性（知恵を出し合っていないと解決できない）
 - ・必然性（一人では解決できない、話し合えないと解決できない）
 - ・多様性（考えが違うことを楽しむ）
 - ・切実性（自分たちが何とかしなければならない）
 - ・創造性（新たな価値を創造する）
 - ・利得性（新たに何かを得る）
 - ・共助性（互いに補う）
 - ・幸福性（肯定感の高まり・役に立てる）
 - ・対立性（異なる立場が存在する）
 - ・統合性（合意形成をする）
 - ・公共性（みんなにとってよいことを考える）
- など

＜図 4 課題設定の工夫に含まれる要素例＞

4 非認知能力を発揮する学習基盤を形成するための「共に分かるプロジェクト」（全体研究）

共によりよい生活を創造する子どもにとって、学習集団として、自分の考えを素直に言えることや分からないときに分からないと言えること、友達の考えのよいところを見付けることなど、互いに高め合う関係性の構築が欠かせない。また、様々な非認知能力を発揮するためには、子どもたちにとって安心、安定、居場所が大切である。さらに、教師も子どもたちの関係性の構築のために、非認知能力の発揮を促すという側面から、自己の指導を顧みて、次に生かすことが必要である。

そこで、本校で継続的に行われている「共に分かるプロジェクト」を非認知能力の側面から改善した。以下は、教師と子どもが月に1回、振り返りを行うチェック項目である。この振り返りを基に、教師は自己の指導に生かし、子どもたちは自己の学びに生かして、学習基盤を整える。このように、学校が継続的且つ組織的に、子どもたちの様々な非認知能力の育成に取り組んでいく。

「共に分かるプロジェクト」振り返り項目（子ども）	「共に分かるプロジェクト」振り返り項目（教員）
問題や課題を解決したいという気持ちをもって、諦めずに学習に取り組んでいますか？	子どもが、解決したい（し続けたい）という気持ちをもてる問題や課題を設定していますか。 （魅力的な課題、生活や経験と結び付けた課題等）
分からないときに、分からないと素直に言えますか？	安易に否定や非難をせず、発言や発表を認めながら、子どもが、分からないと素直に言える雰囲気づくりができていますか。
誰とでも、自分の考えを伝え合っていますか？	偏った人間関係にならないように学習活動を工夫していますか。
友達に自分から考えを伝えて、納得してもらえていますか？	自分から発言している子どもや分かりやすく友達に伝えている子どもを称賛していますか。
あいづちをうったりハンドサインを出したりしながら、友達の考えを聞いていますか？	子どもが、相槌をうったりハンドサインを出したりしながら、友達の考えを聞けるように、子どもの反応を観察したり、指導したりしていますか。
自分の考えと友達の考えの同じところや違うところを見付けていますか？	話し合い活動の際に、子どもが目的をもって考えを伝え合えるように、「考えを1つにまとめる、様々な考えをより多く出す、共通点や相違点を見付ける等」の話し合う目的を共有していますか。 子どもが、自分の考えと友達の考えの共通点や相違点を見付けられるように、「線を引く、丸をつける、納得した相槌をうつ、共通点や相違点を指摘する等」を促す手立てを講じていますか。
友達の考えや動き、作品のよいところを見付けていますか？	子どもが、友達の考えや動き、作品のよいところを見付けられるように、互いの考えや動き、作品を見合う機会を設定する際に視点を提示していますか。
友達の考えを参考にして、自分の考えや動き、作品などをよりよくしていますか？	子どもが、友達の考えを参考にして、自分の考えや動き、作品などをよりよくできるように、自己の考えや動き、作品を評価・改善する機会を設定し、子どもの変容を見取ったり、変容を価値付けたりしていますか。
友達の困っていることや間違いを受け入れたり、友達の考えや気持ちを分かろうとしたりしていますか？	子どもの考えや気持ちを理解しようとしていますか。 子どもの困り感や間違いから学習を深めようとしていますか。
問題や課題を解決する中で、自分の考えや動き、作品に自信がもっていますか？	子どもが、問題や課題を解決する中で、自分の考えや動き、作品に自信がもてるように、価値付けをしたり、学級で取り上げたりしていますか。

＜表1 共に分かるプロジェクトの振り返り項目＞

研究主題 共によりよい生活を創造する子どもの育成

自分のみならず，他者や社会，自然などの幸せにも目を向けて，
自らの手で現状の生活を改善し，共によりよく生きていくことの
できる生活を創造する子ども

下の問題解決的な学習を繰り返す

教科等の本質的な学び

教科等を学ぶよさ



「他者と協働する力」を 発揮する学びのデザイン

活動 環境 構想
教材 課題

プロセス

教科等の特性による
「他者と協働する力」を発揮
することに対する困難さから
「他者と協働する力」が発揮
されるまでの子どもの意識

教科等の特性による「他者と協働する力」を発揮することに対する困難さ

非認知能力を育てる
学習基盤「共に分かるプロジェクト」

<図5 全体研究概要図>